有機農業を通じた都市農業の新たな多面的機能の発揮

研究員　石塚修敬

1　都市農業が発揮する多面的機能

市街地で行われる農業、いわゆる都市農業は、新鮮な農産物の供給や、農業体験の場、さらには災害時の防災空間として、都市の生活・社会環境の構築に貢献している。加えて、営農を通じて、緑地空間の提供、国土・環境の保全、都市の自然環境の形成にも貢献している。そして、都市農業の存在は、都市に住みながら農業への理解を醸成する場として機能している。これらは都市農業の多面的機能と呼ばれ、いずれも持続可能な社会を実現するために期待されている機能である。

本稿では、東京都板橋区で有機農業を実践するTHE HASUNE FARMの事例を通じて、都市農業が発揮する多面的機能の新たな側面を紹介する。

2　有機農業の実践による地元内資源循環

農場長である冨永氏は、会社勤めをしながら民間の農業大学校に通い、有機農業を知った。大学校を卒業後、関東の有機農家のもとで1年研修を受け、2019年に家族の農地を継いで板橋区に自営就農した。それ以降、専業農家として、区内の30aほどの圃場と、区外の60aほどの圃場で大根、ナス、インゲンなど数十品目に及ぶ露地野菜の有機栽培を実践している。

有機栽培の基礎的な技術は研修で学んだものの、病害虫や生育不良など発生するトラブルはその土地や環境によって異なる。日頃から本やインターネットでの情報収集や短期の研修の受講、また農閑期は他の有機農家のもとへヒアリングに行くなどして、技術の向上に努めている。

採れた野菜は、主に地元の消費者に直売し、一部はレストランにも販売している。後者には自ら経営する農家レストランも含まれる。

有機農業の実践にあたって、重要なポイントのひとつが土づくりである。農場で使用する堆肥の一部は、近隣の家庭から出る生ゴミや農場の野菜を使用しているレストランの食品残さから製造している。食品残さは、飼養している黒鶏（ネラ）に飼料として与えたのち、その残りに米ぬか、近所の神社の落ち葉、もみ殻などを混合して堆肥にしている。

しかし、自家製造の堆肥だけでは量が足りないため、使用する有機堆肥の多くは購入せざるを得ない。自家製造の堆肥を増産したいと考えているが、まずは製造スペースの拡大、次いで原料となる食品残さを安定的に調達することが課題である。

3　農作業体験にとどまらない学びの場

圃場での作業は、農場のホームページとして使用しているSNS上でサポーターズ（援農ボランティア）を募集し、その力を借りることが多い。作業内容は特別な技術を要さないものが多く、誰でも気軽に参加可能である。参加者は地元の人が多く、学生、主婦、就農に興味を持ち始めている社会人など、属性と年齢層は幅広い。

各々、食と農への関心が高いが、学生を中心に環境問題への関心や問題意識が高まっているようである。農作業を通じて、環境に配慮した農業のあり方を学び、考え、実践する場を提供していると言えよう。

4　地元密着の配達販売

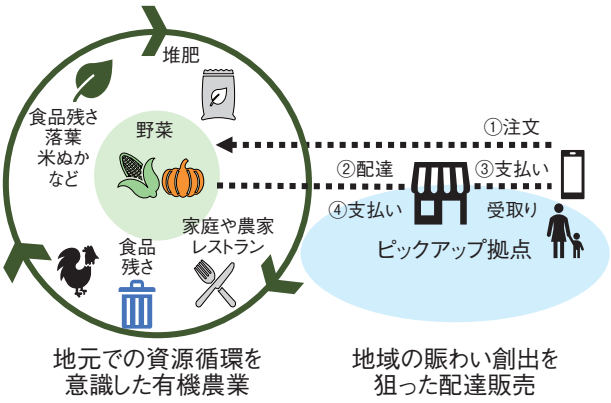
こうして生産された農産物は、飲食店に直売する一部を除き、大半を消費者に直売している。消費者への直売は、次の２つの方法による。

ひとつは、庭先直売である。その日収穫可能な野菜を、希望があれば消費者が自ら収穫し、その重さに応じて代金を支払う、収穫体験とセットになった販売方法である。サポーターズだけでなく、消費者も積極的に農場に招き入れて、農業体験の機会を提供している。

もうひとつは、消費者がインターネットで注文をして、農産物を個人商店（ピックアップ拠点）で受け取る配達販売「ハスネコ便」である。消費者は、専用サイト上で受取場所を選択してから、希望する商品を注文する。農場スタッフが収穫を行い、ピックアップ拠点として協力しているお店まで配達し、店主が商品を預かり、消費者は商品の受け取りと支払いを店頭で行う。代金は、野菜配達時に前払いするか店主が月ごとにまとめて冨永氏に支払っている。

オンライン決済を導入しない理由は、注文者が商品を受け取るついでにピックアップ拠点であるお店で買い物をしたり、店主と世間話をしたりする、地元の賑わいの創出を狙ってのことである。この狙いは的中し、配達販売の開始後、地元商店や消費者の間でその評判は瞬く間に広がり、現在は地元のエリア外も含めて12の商店がピックアップ拠点になっている。

第1図　地元での資源循環と賑わい創出



資料　ヒアリングに基づき筆者作成

有機栽培品であるため販売価格は比較的高く設定しているが、消費者がその価格を受容できるのは、栽培技術の理解と評価だけでなく、こうしたユニークで利便性が高い販売方法もその一因と思われる。

5　有機農業が都市農業の多面的機能に与える新たな一面

THE HASUNE FARMは、有機農業の実践を通じて、地元での資源循環を意識した土づくり、堆肥づくりが大都市に立地していても可能であることを示した。

また、農場での経験や学びは、サポーターズや消費者にとって、農業の理解にとどまらず、資源・環境問題の範囲にまで及んでいる。

そして、販売方法の工夫を通じて地域の賑わいの創出に貢献し、従来の都市農業に期待されていた多面的機能を深化させ、新たな機能を与えていると言えよう（第１図）。

こうした都市農家の意欲的な取組みが従来の多面的機能の枠組みを拡げながら、持続可能な社会、環境の構築に大きく貢献していくことに期待したい。

（いしつか　のぶたか）